

国家観と共同体意識を再認識し、日本の復興に向かおう――

「“人のお世話をならぬよう、 人のお世話をするよう、 そして報いを求めぬよう”という 後藤新平の思いを今一度!」

「今こそ後藤新平の信念を思い起こす時」と語るのは、拓殖大学学長の渡辺利夫氏。関東大震災後につくられた「帝都復興院」構想は、後に拓殖大学の第3代学長になった後藤新平によってつくられたものだ。復興には四つの原則を掲げ、靖国通りや日比谷公園などの新しい都市計画を策定したことでも知られる後藤新平。今、先人たちから何を学ぶか――。

拓殖大学学長
渡辺 利夫 Watanabe Toshio

多くの日本人が「國家」と いうものを感じた

―― 今回の大地震を通じて、われわれは改めて、家族や地域の共同体がいかに人間の人生にとって大切な物かということを思い知らされました。共同体、あるいは国家観というものを先生はどう受け止めていますか。

渡辺

震災前と震災後を比べてみると、日本人の国家観は少しずつですが、変わりつつあると感じられます。

というのも、多くの日本人は震災前、国家、あるいは共同体といったものは自分の外にあるもので、これが「個」としての人間の自由を拘束するものだという見方をしてきたのだと思います。特に、若者やジャーナリズムにその傾向が顕著であったようになります。「個」として生きることが善いという安逸な気分が日本を溢していたのではないか。

しかし、あれだけの規模の大

震災が起こって、自衛隊や消防、警察、海上保安庁の、あの自己犠牲を恐れずに献身的に働く姿の中に、多くの日本人が「わが内なる国家」を発見したと思うのです。

―― 犠牲をいとわず、瓦礫をかき分け、遺体を搬送し、被災地での救済活動に取り組む自衛隊の姿にわれわれも感銘を受けています。

渡辺

この国難とも言える危機的な状況にあっては、情報収集と危機管理を徹底して一元化し、事態に対処しなければなりません。官邸や政府など司令塔の対応ぶりは誠に信じがたいほど稚拙なものでした。それだけに自衛隊の献身的な姿に感銘を覚えなかつた日本人は少なかつただろうと思うんです。政府と国家は同じものではあります。人々は自衛隊などの行動の中に、政府ではなく、まぎれもなく国家を見たのです。

もう一つは、米軍の出動です。「オペレーション・トモダチ（通称、トモダチ作戦）」に2万人近

日本復興へ、いま求められるもの《国家観とリーダーの在り方》



わたなべ・としお

1939年山梨県生まれ。70年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、大学院国際協力学研究科委員長などを経て、2005年より学長をつとめる。

——では、本来、その共同体意識とは何なのか。被災地である東北地方は特にそうした意識が強かつたと思いますが。

渡辺 特に東北地方は家族や血縁に連なる人々との結びつきが強い地域です。ところが、近年、共同体意識というのではなく、

い兵力を投入、空母ロナルド・レーガンを含む20隻の艦艇、最大時には160機の航空機も投入してくれました。なぜアメリカが史上最大の救援を日本に対して行つたのでしょうか。

それは日米同盟があるからです。つまり、アメリカ人からすれば日米同盟という公的な国家関係があるがゆえに、初めてアメリカは日本のために血を流すという道を選択したのではないでしょか。

共同体が無ければ 人は人生を全う出来ない

——つまり、アメリカ人から見て日本は救済されるべき國

家だという認識があつたと。

渡辺

はい。アメリカにそ

思わせる何かが、日本という國家にあつたということだと思います。

震災

前までは国家などという

と自分を拘束する、自由を抑圧するような存在だという考え方でした。特にいまの民主党政権

のリーダーたちは、反国家、国

家なき市民社会、地球市民など

という物言いを好んでいたわけですね。国民と言いたくないか

ら市民と言い、国家と言いたくないから市民社会と言う。

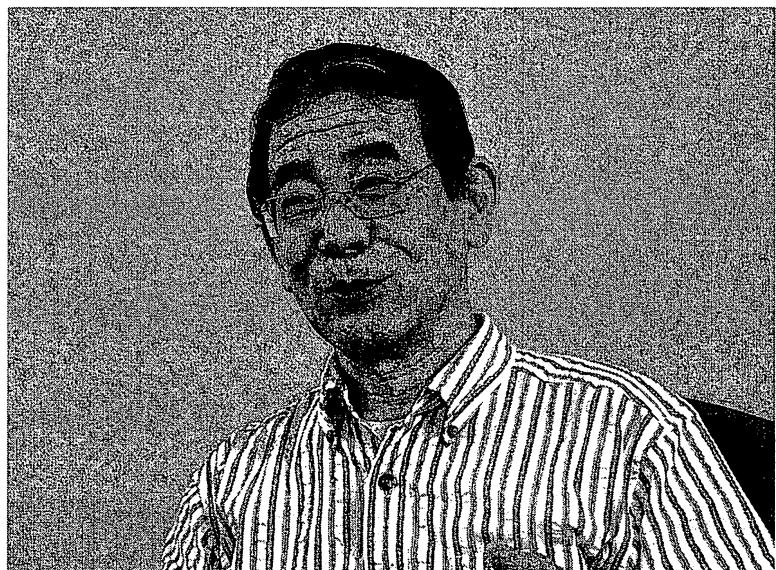
国民の方もこういう話を聞いて、東アジア共同体と言われれば、友好の海の中でわれわれは穏やかに漂うことが出来るんだという、実に軽薄な気分にコミットしてきたように思います。

だから、民主党のような軽薄な気分の政治家が集う政党が生まれたのだと思います。そういう

う軽薄な感覚が今回の震災を通じて崩壊し、徐々に変わっていくのではないか。またそうでなければ、あの大量の死者に私どもは顔向けができません。

ではかなり薄いものになつています。東北地方でもあと1世代もすれば消失してしまつていたのかもしれません。

先ほどの話の繰り返しになりますが、これまで家族や共同体は、「個」としての自分の自由を拘束するものだ、俺は自由な「個」として生きていくんだ、といふことを若者世代が中心に言つていましたね。しかし、共同体が無ければ、人間が人生を全うすることは出来ない。そんな当たり前のことに、この震災を通じてようやく気付かされたと思うんです。辛くも東北の中に共同体が残つており、その重要性を改めて日本人に認識させた思われます。



—— それはどういうところで感じましたか。

渡辺 テレビで見た光景なんですが、どこかの避難所で温かいどんどん振る舞われていたんです。それで避難されている人々が何十人も列を作っているんですよ。

うどんが渡つていったんです。こうした光景を見て、わたしは胸を詰まらせました。日本人はこういう光景の中に共同体というものの尊さを「発見」したのでしょうね。人々の心の中に相互扶助的な精神や原理というものがある限り、東北の復興は確実なのではないでしょうか。

—— 地域に譲り合いの心があつたということですね。

渡辺 ええ。こうした心といふものはもともと日本人の中に強く潜在していたものなんです。が、この戦後六十数年の安逸な平和の中でいつの間にか消失してしまつたんです。それが東北の農漁村の中には残つていた。そのことが改めて今回の震災で露わとなつた、ということです。それで気付かされたと改めて気付かされたと。

—— 本來忘れていたものに改めて気付かされたと。あるいはこの六十数年の間に無事である老人と子供たちの手に意識下に押し込まれていた一番大切なものが、震災という非常事態において引き出されたような気がします。

—— 大学でそういう話をされた時に学生たちはどういう反応を示しますか。

渡辺 もちろん、理解しています。いまの子供たちも自分を超える第三者のために何か役に立つことをしたい、という潜在意識を持っています。われわれの時代に比べれば、食べるのに困ることはありませんから、その分だけ何か良いことをしたいという気持ちが強い。ですが、こんな豊かな社会の中では自分が手を差し伸べなければならぬものが見えてこないんです。

わたしの大学で言えば、このゴールデンウィークに国際学部の学生たちがボランティアで20人ほど被災地の石巻（宮城県）に行つてきました。これはボランティアですから、学校が命令したものではなく、完全に自發的なものです。

—— 20人が手を挙げたわけ

